

開 会 挨 拶

滋賀県琵琶湖環境部理事・琵琶湖環境科学研究センター研究企画統括員

上田 一好

失礼します。みなさんこんにちは。2008年の正月が明け、早々の研究会をさせていただくことになりました。今年一年も幸多き良い一年でありたいと、願っているところでございます。

正月の新聞やテレビの報道を見ますと、地球温暖化問題が環境問題のトップ、あるいは全体のトップとして大きく報道されていました。私たちの人間活動が、もう地球の許容量というか、地球、自然の持っているその生態系メカニズムの許される大きさを超えてしまったのではないかと、その時、私たちの叡智はどう対応したら良いのか、という非常に大きなテーマが私たちに突き付けられつつある、と、この様に感じております。

私ども滋賀県でございますけれども、滋賀県の環境問題の中心はやはり琵琶湖でございます。琵琶湖は、私たち滋賀県の活動を映す鏡として、私たちに色々な警告を与えてくれている所と、思っております。

今、琵琶湖の深い底の方で、低酸素化というか、地球温暖化も原因の一つだろうと思われましても、低酸素の状態が続いておまして、生物への影響も危惧される、心配な状態になっております。

昨年冬は、異常な暖冬と言われておりましたけれども、今年の秋も少し温度が高こうございましたし、まだ寒さ厳しいというところまでいたっておりません。いったいどう変動していくのかということで、センターといたしましては、監視を定期的に続けています。

そういう琵琶湖でございますけれども、経年的に大きく見ますと、透明度など水質は、私ども、回復しつつあると、このように思っております。一方で南湖では、水草が異常繁茂し、生態系のトップにあります魚については、在来種の魚の漁獲が激減をし、外来魚が繁殖するというような事態に立ち至っております。

湖辺も大きく変化致しました。率直に言って、従来の琵琶湖が持っていた豊かな生態系が崩れつつあるのではないかと本当に心配しているところであります。

そこで、琵琶湖環境科学研究センターは今年度から、「湖岸生態系の保全修復および管理に関する研究」という三年計画のプロジェクト研究を立ち上げ、湖岸の管理のあり方というものを、生態系を通して、答を出していけないかという研究を始めたところであります。

研究会を本日3回目ということで開かしていただいているというのは、このプロジェクトの研究会ということになります。

本日は、「霞ヶ浦に学ぶ湖岸の生態系保全」というテーマで開催をさせていただきます。霞ヶ浦、東京のほうから、湖岸再生での取り組みの研究、あるいはいろいろなお取り組みをされています三人の先生方に、遠路はるばる琵琶湖までお越しいただき、その取り組み報告をお願い申し上げたところでございます。

また琵琶湖の状況も何とかご紹介したいということで、コメンテーターとして、三人の方々にもご無理を申し上げました。

高い所からではございますけれども、あらためて本日の研究会にご出席いただきました先生方に厚くお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

是非、みんなで、十分に霞ヶ浦の取り組みを学びたいと思います。

そのあとの総合討論では、会場の皆さん方も含めまして、大いに議論をお願い申し上げて、琵琶湖の湖岸管理、あるいは湖岸生態系の保全生態の解決の方向付けであるとか、取り組み視点について、明らかになるような研究会にしたいと、期待しているところでございます。会場の皆さん方に、お礼を一言申し上げ、挨拶にかえたいと思います。正月早々本当にお忙しい中お集りいただきまして、ありがとうございます。

今日の研究会の成果があがりますようお願い申し上げます。本日はどうぞよろしくお願い致します。